# 國文學 2

日本語・日本文学・日本文化 ―― 解釈と教材の研究

二〇〇八年 第五三巻二号

特集 早稲田と慶應

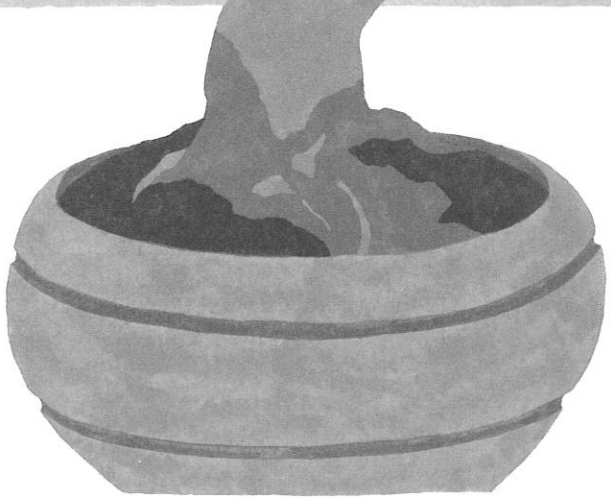
❖ 対談 早稲田文学×三田文学

❖ 森まゆみ 早稲田、町の魅力

❖ 大隈重信と福沢諭吉／最後の早慶戦ほか

第二特集 追悼 サイデンステッカー先生

ピーター・ミルワード 安西徹雄 伊井春樹 ハルオ・シラネ



學燈社

國文學 解釈と教材の研究

平成二十年二月十日発行（毎月一回十日発行）第五十三巻第二号二月号
昭和三十一年九月二十五日 第三種郵便物認可 （通巻七六二号）

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五三巻二号 二〇〇八年二月号

辞典七〇〇点突破！定評のある東京堂の辞典

**江戸狂歌本選集** 全十五巻完結
選集刊行会編 明和～安政期の江戸の代表的な狂歌集七十四種を原本に忠実に初めて翻刻した。江戸文芸の研究には必須の資料。第十五巻発売中 定価各一五七五〇円

**古文書・手紙の読み方**
増田 孝著 難解・難読の古文書の手紙の判読の方法を入門者でも解読できるように、著者が推賞する筆跡法を紹介しながら懇切丁寧に解説した 定価一八九〇円

**日本語の文体・レトリック辞典**
中村 明著 長年、日本語の文体論・表現論を研究してきた著者による本格的な日本語のレトリック・文体論辞典。約一〇五〇項目を収録し解説 定価三三六〇円

「鎌倉遺文」にみる **中世のことば辞典**
ことばの中世史研究会編 古文書の中に出てくる言葉約一五〇語を選び中世での意味・用例の初出・その変化などを解説したはじめての国語辞典 定価五二五〇円

CD・ROM版 **くずし字解読用例辞典**
山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆定価二九四〇〇円

（価格は税込）

東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1―17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
http://www.tokyodoshuppan.com

**水鏡とその周辺の語彙・語法**
小久保崇明 A5判 9450円
『水鏡』に顕在している中世的語彙・語法を詳細に検証。『大鏡』他にも言及する、著者渾身の一冊。

**古今集校本** 新装ワイド版
西下経一・滝沢貞夫編 B5判 9975円
梅沢本を底本に70本もの諸本を校合。各首毎に校合本を遡れる至便の名著を拡大本文で復刊。

**稲賀敬二コレクション**
全6巻完結！
豊饒にして刺激に満ちた稲賀ワールド。国文学界に鮮明なインパクトを与え続けた著者の単行本未収録論考群を収める。
①物語流通機構論の構想 A5判 8400円
②前期物語の成立と変貌 A5判 6825円
③『源氏物語』とその享受資料 A5判 9450円
④後期物語への多彩な視点 A5判 8400円
⑤王朝歌人とその作品世界 A5判 9450円
⑥日記文学と『枕草子』の探究 A5判 11550円

**萬葉集全歌講義** 第三巻（巻5・6） A5判 12600円 全十巻
阿蘇瑞枝 国語学・考古学ほか、諸分野の研究成果をふまえた総合的古代研究。

**文机談全注釈**
岩佐美代子 A5判 12600円
平安初期から鎌倉後期に至る雅楽、特に琵琶の歴史を、親しみやすい説話の形で物語った、類例のない貴重な文学作品。初の全注釈。翻刻・現代語訳対照の読みやすい二段組で、人を得てその全貌が遂に明らかに。
岩佐美代子著・二点重版！
京極派歌人の研究 改訂新装版 A5判 12600円
京極派和歌の研究 改訂増補新装版 A5判 14700円

**西鶴と浮世草子研究** 第二号◎特集 怪異
高田衛・有働裕・佐伯孝弘 編 A5判 2625円
人々は怪異譚を追い求め、作者たちはそれを提供した…。江戸期に揺曳しつづけた怪異をあらゆる角度から論じ尽くす。豪華鼎談、高田衛×小松和彦×長島弘明。豪華特典CD収録「怪異物揮絵大全」（佐伯・近藤編）／杉本好伸編「武太夫物語絵巻」（歴博蔵）。堤邦彦・有働裕編「江戸の怪異スポット」他。

笠間書院 〒101-0064 東京都千代田区猿楽町2-2-3 電話03-3295-1331
http://www.kasamashoin.jp/ ファクス03-3294-0996 （価格は税込）

ISSN 0452-3016
雑誌 03787―2

4910037870285
01524

Printed in Japan

連載

# 心意伝承

## ―遊働世界に生きる―

第五回　夢の在りかを覓めて―境界認識の原像―①神託による聖地発見

本荘雅一

### 生活空間の文化史

「昔から今に至るまで変わらないもの」を探し求めようとする動きが、現在のブームとなっている。数学者藤原正彦の『国家の品格』（二〇〇五年　新潮新書）を皮切りに、古くからある、日本の特徴を見直そうというテーマの本もあふれるほど出て、しかも売れている。また古武術を通じて、前近代的な身体操法の積極的効能を取り戻そうという動きも盛んで、このブームの火付け役になった甲野善紀は海外を飛び回っているらしい。こうしたもろもろの動きは、それぞれ目的は異にしても、心意伝承に直結するものには違いない。「心意伝承」とは言わなくても、伝統的な心意気、感性、身体観、それらに基づく生活すなわち生命活動の妙味に、現代のかわいた空気にさらされた魂を沈めてみよう、洗い直してみようという動きである。それが、実は現代社会の最先端を走る人たちの間でこそ、強くなってきているのではないか。実際教えられることも多い。なかでも建築学者上田篤の『神なき国ニッポン』（二〇〇五年　新潮社）にあった、次の一節に注目したい。

> それぞれの国には「原カルチュア」とでもいうべきものがある。それは一種の民族的遺伝子、あるいは民族の文化的遺伝子、カルチュラル・ジーンといってもいい。少々社会が近代化しようとそれは変わらない。じーっと社会に沈潜していて、ときどき表に出てくる。
>
> それは哲学とか思想という立派なものではない。法律や契約書のような文書でもない。ふつうの人々の、ふつうの言葉の表現のなかに現われている。さらに表情、しぐさ、身のこなし、喜怒哀楽、ものの価値観まで、その民族に固有のものです。そういうものは、その国の気候や風土、歴史や文化としっかり結びついてつくられてきた。そう簡単になくならない。（一〇九頁）



我田に水引いて、心意伝承の説明として読んでもわかりやすく、完璧ではなかろうか。

上田の学問の態度は『日本人の心と建築の歴史』（二〇〇六年　鹿島出版会）に、端的に語られている。建築は、あくまでも生きた人間の住まうところなのであるから、単に「仏教建築様式史」といった、人間不在の学問であってはならない。依って立つ専攻が工学系であっても、「一般歴史学、考古学、民俗学、人類学、宗教学、土木工学、地理学、地質学などをどうじにかんがえよう」（一七頁）という、統合研究なのであった。それによって、建築の「強・用・美」といった、構造と機能と感性のみならず、「聖」という心意現象にまで踏み込む。帯に「生活空間の文化史」ともあるのが頷ける内容で、これまた我田引水、『日本人の心の歴史と建築の歴史』と読み替えたい書物であった。縄文期から近世近現代にいたるさまざまな建築物や、風土と人間との接触の仕方について、実利と信仰心、イメージ世界の一致するところを快刀乱麻に語り出す。たとえば、縄文人の円形の「壁の住居」から、弥生人の方形の「柱の住居」への変遷、そして小さなアパートでも必ずバルコニーを設ける現代日本人の住居の意味を、次のように説いている。縄文人は、雨風の侵入を防いで、食糧を煮炊きする火を守った。弥生人はコメの豊饒を約束する「太陽と水」の状態を知るために、開放的な建築構造とした。そうした実利に即しての外形の変遷はあったが、いずれにせよ、縄文人は火を主な神とし、弥生人は太陽と水を主な神として、それらの気をくみ取り、それらの精を身につけようとした。

歴史学はいつでも、物事の移り変わりを指摘する学であるかのごときだが、上田はそこに留まらず、心性史における通時的共通性を見ようとする。この場合、「聖」なるものの感じ取り方やかかわり方の共通性といった心意伝承的な次元にまで、論を及ぼすのである。現代日本人が、西洋人とは違って、小さな窓だけの部屋には堪えられず、バルコニーという「人工の庭」を、内外の境界部分に設置したり、大人の背丈ほどもある巨大な窓を必ず備えて、太陽に向かって屋内を開放しようとするのも、同じく「聖」なるものの精を身に受けようとしての

ことであると述べる（二四八～二五五頁）。全く見事な心意伝承論というほかない。

専門分化しすぎた学問の統合の重要性は、頭ではわかっていてもおいそれと出来ることではない。それを実践している人もいる。止むに止まれず、上田のもとに推参して教えを請うたことがあった。上田はその非礼を責めるどころか、文系の私のために、難しい数理は使わず、民俗学的、宗教学的、心理学的、歴史学的、文学的、芸術学的な側面から、人がこの世に住まうということの根本原理についての見解を、わかりやすく語ってくれた。ただ圧倒されてばかりであった。日本もまだまだ広い、そう実感させられた。

## 意識世界としての境界領域

人間はどうやって、生きる世界と出会うのか。ここは長居する土地ではないとか、ここは離れがたい、といった区別は、何が基準というのでもないが、なんとなく感じてしまう。これは個人的な居住空間に限ったことでもないだろう。城や宮殿、都市のような公の場の造営についても、単に政治・経済・軍事的な要衝というだけではない条件があるのではないか。いわゆる観光地には、観光地と呼ばれるだけの、何か観るべき光を、私達は感じ取ってしまっているのではないか。歴史的な遺跡さえあれば全てが観光地になるわけではないのだ。

それも、心意伝承によるのだろう。「ああ、まさにここは神々の領域だ。今が神々の遊ぶときだ」と、お祭りの空間・時間に立ち会ったときなど、誰もが素直に感じるだろう。「そこが決戦場だ」と武将が判断したり、「あそこが我が故郷だ」と都会生活に疲れた人がつぶやいたりする、その、「ここ」「そこ」「あそこ」といった、ひとまとまりの宇宙は、現実の空間・時間を超えた、意識世界になっているのではないか。そして、こうした意識世界こそが、私達にとって生き死にの時空を確定するための、境界領域の原像なのではないだろうか。

ここで言う境界とは、現実の土地の上に境界線を引いて一括りにした範囲のことではない。明確な範囲限定ではなく、風景のようなイメージである。特定のイメージ世界にたいして異質なものが認識されれば、その異物がすなわち外部であるような、ひとまとまりの風景イメージと考える。トンネルを抜けたとたんに、降りしきる雪国になったという、気象条件によるものばかりでなく、多摩川を越えるとなんだか別世界に入った感じがすると、車窓からつぶやく人の実感にこそ、境界認識の原像



が現れている。

また時計で示す時刻限定ではなく、何か特異なイメージが展開する「とき」のことでもある。たとえば年中行事等の祭りが行われる「とき」に関して、折口信夫は周期伝承の発生としてこう述べる。「（周期伝承は）暦日的に定着したもので、過去の長い部落生活の上に、権力の催励以外に、或不可抗的な内発意力によって行はれて来たものである。暦日によるといふことは、むしろ後世のことである。却ってそれによって暦日観念が起ったと見た方が正しい」（「民俗学」『全集十五』六頁）。元来祭りは「臨時祭」であって、「神が現れた」「神の恩恵をたまわった」「神の怒りに触れた」等々と人々が感じた時に臨んで、行われるものであった。相撲の仕切りも、テレビ放送の無かった昔は「制限時間」が無く、力士同士の気があった「とき」に立ち合ったらしい。

そうした、なんらかの「とき」もまた、境界領域である。日常の「とき」、冠婚葬祭その他の非日常的な「とき」。論理的なカテゴリー設定は困難だが人々の間ではごく自然に、感覚的に共有できる「とき」も、境界領域なのである。このように、心意伝承の観点からアプローチする境界領域の原像は、物理的、制度的な境界線ではなく、人々の共通の意識世界、イメージ世界である。

## 夢と現実のコンステレーション

次のような、素朴な問題提起から始めてみる。

神社仏閣等の聖地は、なぜ神仏のお告げ、夢のお告げによって発見されるという伝承が多いのか。

多いというよりも、ほとんどそういう条件の下でしか、聖地は見出されないと言っても過言ではない。岩波日本思想大系の『寺社縁起』を見ても、群書類従正続の釈家部を繙いても、深山幽谷に分け入って行ずる者が神仏の夢想を得て、霊験あらたかな寺社を開基するというのが、まるで法則であるかのごとしである。

いったい託宣や夢に、どのような意味を見出していたのか。多くの日本人たちが特別大事にしてきた場所が、神託や夢と結びついて発想されることの意味を問いたい。

そのために、ユング派心理学でいう、コンステレーション(constellation)という把捉法を援用することにはなろう。コンステレーションとは、布置とか星座などと訳される言葉で、私達が無意味な星の散らばりの一部を組み合わせて、「ひしゃく」と見たり「白鳥」と見たりするような、全体状況の関連のさせ方、意味づけ方を指

していう。心理療法の立場では、現象を、自分とは切り離したものとして対象化することをせず、自分をも含んだうえで、現実に起きることと、自分の心の状況とを結びつけた世界様相の捉え方が、コンステレーションである。「偶然の出来事が形作る状況の配置」（『講座心理療法第7巻　心理療法と因果的思考』六二頁　二〇〇一年　岩波書店）とも説明される。

たとえば、ない勇気を振り絞って想う女性に告白しようと決めたとたん、コップを落として割ってしまい、それで諦めたことがあったが、これなども自分があれこれ経験している内的・外的状況の、偶発的な部分を、強力な意味連関で把握してしまっていたわけである。なんのことはない、砕けたコップは自分の怯懦と読めば、そういうコンステレーションにも違いなかったのに……。そういえばこんなこともあった。若い頃だったが、大和の代表的な聖地三輪山登拝を果たし、降り始めてしばらくすると、また追いついてしまった家族連れが道をあけて私を通してくれた。頂上でお嬢さん十六才の誕生祝いをしていた人々である。こんにちはこんにちはと掛けあいながら通り過ぎてゆく。と、先頭のおじいさんに言われた。「結婚してるかね？」「あ、はい。」そのままどんどん降りて、沢に出ると、岩に伏せてたカラスアゲハがふわっと飛んで、さっきの質問の意味が唐突に分かった。なんと、三輪の神様のお引き合わせにより……、というコンステレーションに、巻き込まれるところだったわけだ。恐るべし三輪山。やばかったような、惜しかったような……。

領域の発見・生活世界の確定と、託宣や夢想とのコンステレーションに、日本人の典型的な心意伝承が読みとれるのではないだろうか。

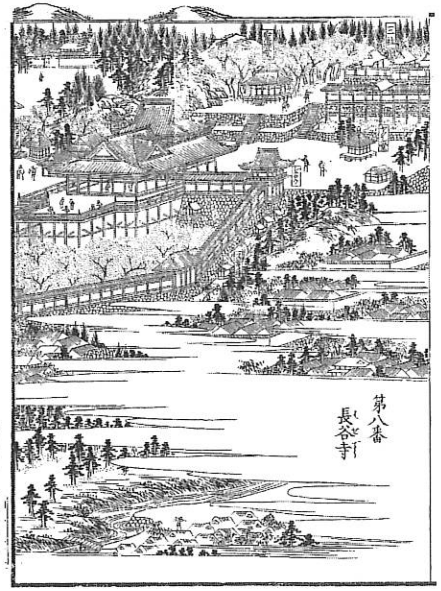
そもそもは、日本史上における夢の扱われ方は、おおむね次の三段階に分かれるという見解が一般的である。第一に、古代において夢は神意神性の顕れ、現実世界の未来を予告する霊験あらたかなものとして、信仰の対象であった。第二に、中世・近世期にいたって、「夢まぼろし」とは無常なるもの、はかないものの象徴として扱われはじめた。神意としての価値は、希薄になりつつある。第三、近代以降は、人間個人の無意識のあらわれとして、精神分析の素材となった（体系的な研究書としては、西郷信綱『古代人と夢』一九七二年　平凡社。江口孝夫『日本古典文学　夢についての研究』一九八七年　風間書房。カラム・ハリール『日本中世における夢概念の系譜と継承』一九九〇年　雄山閣。などを参照）。

おおよそ右のような展開が認められるとしても、それは新旧交代して古いものが消滅することではあるまい。現代に生きる私達自身、正夢とか逆夢といったことを口にするだけではなく、実際深刻に受けとめる。「試験に落ちる夢を見てしまった」と青くなる。また直接の夢告や託宣ではなくても、神のお告げのような感じ取り方をする場合も少なくない。入院した人に、「これはきっと『働きすぎたから休みなさい』ということなんでしょう」と、誰に命令されたかは不問にして慰める。古代人が託宣や夢に支配されるような感受性は、今に生きているのだ。こうした、夢託と現実との組み合わせ方の通時的共有が、心意伝承である。



## 夢と現実のトランスフォーメーション

夢によって発見された聖地は、寺社として整えられ、人々の信仰を集め、参拝されるようになる。すると今度は、さまざまなお土産を人々に配るようになる。御神水、お札、おみくじ（つまり託宣）、「霊験あらたか」な葉っぱ・木の実・木の皮・石・鉱物、そして夢である。「土産」という文字が示すとおり、その聖地の霊気を受けた産物に、威霊が宿っていると感じ取られるから、旅に同行しなかった人々にも分け与えられるよう、余分に持ち帰る。その中に「夢」も入るというのは現代人には理解しにくいかもしれないが、かつて聖地聖所は夢を授かるところとしても信仰されていたと、すでに西郷信綱が『古代人と夢』で指摘している（第三章長谷寺の夢）。著名なところとしては、滋賀県の石山寺、京都府の清水寺、そして奈良県の長谷寺などを挙げ、そこは「夢を授ける聖所であった。そして人々は夢を授けてもらうため、この長谷寺に詣でた」という。聖地聖所のそうした性格を語る「記録」としては、『長谷寺霊験記』（続群書



「西国名所図絵」より

類従第二十七輯下）が最も大部なものであろう。ほかに、『清水霊験記』（続群書類従第二十六輯下）、『石山寺縁起絵巻』（『日本絵巻物大成』中央公論社）、『春日権現験記絵巻』（『日本絵巻物大成』中央公論社）などが有名だが、寺社縁起の類を丹念に調べれば、おびただしい事例がでてくると思われる。

説経の物語を見ると、このような聖域が、申し子の話と結びついていることに気がつく。あいごの若や松浦さよ姫は長谷寺の申し子。しんとく丸は清水寺で、をぐりは鞍馬の毘沙門天とある（『新潮日本古典集成　説経集』）。いずれも、子のないことを嘆く夫婦が、崇敬する寺に参籠し、夢のお告げを受けて懐胎するパターンである。

長谷寺のような、夢の名所的な寺社は、いわばサーバーであろう。神仏の幽れいます冥界と、現し世の人々とをつなぐ、相互交渉の回路である。参籠し、仏前で寝ることで、人々の心に冥界の〝意思〟を夢として招来する。夢を授かった人々は自分の心という個人的意識でイメージをわかりやすく編集し、「霊夢」として他の人々にも送信するというか、語る。こうして人々の生活にもたらされる、さまざまな物も夢も、宇宙冥界からの恵みとして謙虚に受けとめ、物質的にも、徳の面でも、豊かな生活を営むようにしてゆくシステムなのである。

現代のネット文化自体、日本人の心意伝承に即した技術として受け入れられていると言える。留学帰りの学生から聞いたのだが、アメリカでは、携帯電話mobile phoneのメールはほとんど使われず、通話が盛んなので、企業側も通話料金の引き下げに血道を上げているという。いわれてみれば、私も韓国を旅行したとき、バスの中でもケータイでしゃべりまくる人を見こそすれ、メールを打つ人は記憶にない。メールがこれほど盛んなのは、すぐれて日本的現象なのかもしれない。ネットへの書き込みやメールのやりとりは、何だか、冥界からの反応がある日記のようなものだ、と思ったことがある。まさに異界との交渉に惹かれる心意伝承に支えられ、ケータイを呪具として発動する、時空変革に違いあるまい。実際、最近のヒーローものは、ケータイを使って変身している。

閑話休題。こうした夢の回路としての役割を果たす聖地は、具体的にどのような演出を施されているかについても、西郷はわかりやすく説明している。先述の大和の長谷寺に関する章に注目してみる。いわゆる長谷観音の信仰の背景には、水源地帯や岩窟・洞窟を母胎と見立てる信仰があり、そうした母性原理によって、観音の大地母神としての性格が支えられてきた。「夢を授けるものとしての観音が地母神の性格をその根底にもっている」



のであり、「夢は大地にぞくするものである」というのである（『古代人と夢』第三章）。万葉以来、「こもりくの泊瀬」と詠われてきたように、深山幽谷の、籠もり奥まった地域にこの寺は位置している。三輪山の南側から、泊瀬川沿いに東へ遡ってゆくと、両岸に山地の迫った典型的な谷地形が北側へ折れ曲がり、不意に、巨大な袋の口を開く。そうして、中が覗けたような風景が、前方に広がったことであろう。今は人家が多くてその感じがつかみにくいが、その袋の奥の、雛壇の上に長谷寺はあり、その麓の楼門から、泊瀬川が流れ出ているような風景である。そうした母胎イメージの景色が、夢をもたらすものと信仰されている。

ただし、なぜそうした環境が、夢を生み出すと観念されるのか、ということについては、まだだれも議論していない。結果的に〝夢の授与〟にいたるような、独特の印象なり、そうした場の力なりをその土地から受けるのであろう。その様な場の威力についての、日本人の感受性を、追究してみたい。

よく考えてみると、夢を授けるといっても、物を授けるように一律にはいかないはずだ。ついに夢を見ない人も少なくなかっただろう。だからその代替商品として、寺社縁起に語られる神仏の神徳や、鎮座後の霊験譚などを、巫女や法師その他の芸能者達による演奏と語りで、提供し始めたにちがいない。人形や、仮装した俳優を使った演劇も次第に発達したであろう。現代人は、劇場、映画館や遊園地、テーマパークに、何度も再生できる〝夢〟の販売と消費とを任せている。それは、〝夢〟の舞台構築の技術が発展しているから可能なのであって、映像技術のなかった昔は、自然の山や川、海、空、雲、風の音などの風景を、スクリーンにしたことだろう。今でも三重県安乗の人形文楽は、正月の日の出の海岸で三番叟を演ずる。その不気味な神々しさとめでたさは、何とも曰く言い難い。人形に神霊が宿って舞うとも見え、あるいはこのような演出が、背景そのものの神々しさやめでたさを、引き出しているとも感じられる。空と海と風などが、ご神体ということだ。ライトアップした薪能はいささか興ざめだが、もとは薪のみの、よろめく火明かりのなかにぼうと浮かび上がる小面や般若の霊体が舞ったことだろう。想像しただけでぞくぞくする。これなどは夜の闇そのものをご神体とした祭りではなかったか。もう察しもつこうが、一月一日になったから正月元旦なのではなく、自然の霊気充満する空間を、さまざまな演出で祭り、非日常的な夢幻の世界を催すことが、正月への時空変革であったはずなのである。